



全ては対話から始まる



精神科認定看護師
鈴木優也

【好きなもの】
サッカー
アニメ（特にワンピースとキングダム）

【マイブーム】
好きなアニメの考察動画をみること

こんにちは。愛知県精神医療センター精神科認定看護師の鈴木です。精神科認定看護師の活動を始め2年が経とうとしています。日々の活動に協力をして下さっている全ての方々に、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

さて、現在私が所属する病棟では、長期入院患者の退院促進・地域移行を一つの目標に掲げ、質の高い看護を提供できるよう日々取り組んでいます。私が普段より大切にしているのは、意思決定支援です。様々な技術やプログラム、理論などが出てきていますが、全てに共通しその基盤になるのは“対話”であると考えます。

病棟一丸となり、患者様やそのご家族が望む生活の実現に向け、多職種や地域支援者も巻き込みながら患者様の意思決定支援を行う…。それらを目的とした患者参画型の看護を重要視し、ご本人と多職種で対話を目的としたオープンダイアログや患者参画型カンファレンス、看護外来など、手探りではありますが様々な取り組みを行っています。

個人でできることには限界があります。これからたくさんの方々のお力を借りながら、病院と地域をつなぐ橋渡しのような活動が行えていけたらと考えています。



Information

2025年 文化祭を開催しました！



11月8日（土）に文化祭を開催し、患者さんやご家族、地域の皆様など多くの方にご来場いただきました。

芝生広場の移動動物園では、アルパカなどの可愛らしい動物たちとふれあうことができました。交流プラザのバザーでは、軽食の提供や手芸品の展示販売が行われ、外来エリアでは当院の取組みの紹介ブースや、職員有志によるミニコンサートが開催されました。

城山ホールでは中岡社会復帰部長による「大人の発達障害」と題した講演が行われ、演芸会では名古屋青少年ビッグバンドFreeHillsJazz Orchestraによる演奏や患者さんやスタッフによる歌や楽器演奏、出し物が行われ、大きな拍手が鳴り響いていました。

地域に開かれた病院を目指して来年度も文化祭を開催できればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



愛知県 精神医療センター ニュース

「ひらく、知る、つながる」

愛知県精神医療
センター広報誌
Vol. **24**
2026.1



2号連続特集

精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築（前編）

≫ 認定看護師 + CERTIFIED NURSE
全ては対話から始まる

≫ Information
2025年 文化祭を開催しました！

精神障害にも対応した 地域包括ケアシステムの構築

～地域共生社会の実現に向けて～（前編）

「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム（通称「にも包括」）」とは、精神障害の有無や程度にかかわらず、誰もが安心して自分らしく暮らすことができるよう、医療、障害福祉・介護、住まい、社会参加（就労など）、地域の助け合い、普及啓発（教育など）が包括的に確保されたシステムの構築により“地域共生社会”の実現を目指す理念として、厚生労働省が平成29年に新たに掲げました。

この理念に基づき、地域の関係者の皆様と当センターの多職種チームで重層的な連携が図れるよう、様々な取り組みを行っています。当センターにおける「にも包括」構築に向けての経緯、取り組み状況などを本号と次号の2号にわたり、詳しくご紹介させていただきます。



多職種みんなで考え続ける場 ～地域包括ケア推進委員会設立の経過～

認定看護師 新美 浩二郎

当センターを目指す
「にも包括」概念図

重層的な連携による支援体制の構築



以前の状況

当センターの「にも包括」構築の中軸となる「地域包括ケア推進委員会」が立ち上がる約5年前、私は長期入院患者さんが多い東3病棟で働いていました。以前から病院全体で推進していた地域移行促進によって、長期入院患者さんの割合は減少傾向でしたが、様々な事情で退院できずに5年、10年と入院生活を余儀なくされていた患者さんが多数おられ、地域移行促進の動きは停滞していました。スタッフも「患者さん自身」もどこか退院をあきらめていたのでは、と感じることもありました。いや、正確に言うならば「あきらめざるを得なかった」のかもしれませんが。誰も作りたくなかった「退院をあきらめている病棟風土」が感じられる状況でしたが、実際にはスタッフも患者さんも葛藤を抱えていたと思います。

こうした中、私は入院患者さんはもちろんのこと、スタッフに対しても風土を変える“新しい風”を吹かせることができないか、考えていました。



院内チーム設立のきっかけ

そのとき、「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築」が精神科看護の分野で議論を深めていた時期だったこともあり「このシステムを有効活用できないか」と、このシステムを病棟に導入することを決意したのが始まりです。

“新しい風”を吹かせる思いで病棟での「にも包括」の構築を目指し声をあげると、熱意ある精神保健福祉士が2人、3人と集まってくれ「東3病棟における精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築推進チーム」という活気に満ちたチームが令和2年に誕生しました。



市との連携、委員会組織への昇格

一方、同じ時期に名古屋市が「にも包括」の構築を推進するため、市を4ブロックに分けて様々な事業に取り組んでいました。当センターとして連携を図るため精神保健福祉士が中心となり名古屋市の「にも包括」のシステムを活用する体制を整えることからスタートしました。名古屋市の「にも包括」システムを活用しつつ、そこから病棟医、病棟作業療法士にも声をかけ、次第に多職種構成となっていき、さらに病棟外のスタッフも巻き込みながら活動を続け、ついに令和6年に「地域包括ケア推進委員会」という病院全体をカバーする委員会に昇格しました。



多職種みんなで考え続ける場

現在、地域の受け皿が増え、支援者が増え、持効性注射剤の普及が進むなど、精神障害に対する知識や技術が更新されていく中でも、地域で暮らすことが困難な患者さんがまだまだ多くいます。それは長期入院患者さんだけでなく、入退院を繰り返している患者さんを含まれ、これは当センターすべての病棟で当てはまります。

つまり全病棟全スタッフが当事者意識を持ち、「今の私たちのやり方は社会や患者さんのニーズに則しているのか」を検討し続けたいと思います。

「多職種みんなで考え続ける場」として「委員会」組織が必要なのです。委員会は立ち上がりましたが一番恐れるのは「形骸化」です。当センターの理念である「知恵と工夫」によって、委員会のメンバー自身がやりがいを感じ、患者さんが「自分らしく地域で暮らすため」の戦略を、多職種みんなで常に考え続けることができ、“新しい風を吹き込む”委員会になればと日々、活動を続けていきます。